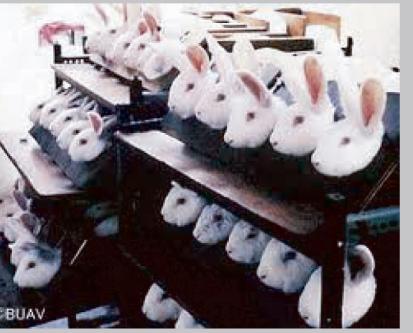


特集

～真の美しさとは～

動物実験に思う



画像：英国動物実験廃止連盟（BUAV）

「美しくありたい」「若々しくありたい」そう願うのは、いつの時代にもある自然な感情です。しかし、その願望の裏側で苦しんでいる動物たちがいる事を知ったら気持ちは穏やかではないはずです。動物の命もまた私たちと同じくかけがえのないものです。本当の美しさは動物たちの犠牲のうえにあるのではなく、動物を思いやる優しさのうえに成り立つものではないでしょうか。私たちの心がけ一つで尊い命が助かるとしたら・・・そこに「人間の真の美しさ」があるような気がします。

動物実験とは

医学や薬学の領域でも動物実験は行われており、それが医療の発展につながってきた面もあるため、一概に動物実験を否定することは難しいかもしれません、特に化粧品開発においては、動物愛護の観点などから、動物実験を廃止する方向性は世界の潮流になりつつあることも事実です。動物実験は医学研究や新薬開発だけでなく、化粧品、日用品、食品添加物、農薬、工業用品など化学物質の毒性試験や、生理学、栄養学、生物学、心理学などの基礎研究、大学や学校といった教育現場における解剖や手技訓練などの実習、あるいは兵器開発などの軍事まで、私たちが暮らす社会のさまざまな分野で行われています。マウスやラット、モルモットから、犬や猫、ウサギはもとより、鳥類、魚類、ヒツジ、ヤギ、ブタ、ウシ、さらにはサルやチンパンジーなどの霊長類に至るまで、実験に使われる動物の種類は多岐にわたり、世界中で、毎年1億1530万頭以上の動物が実験の犠牲になっていると言われています。また、日本では過去に、保健所へ持ち込まれたペットの犬や猫の一部が全国の自治体で動物実験用に払い下げられていきました。しかし、東京都を皮切りに払い下げ廃止を決定する自治体が続き、2006年（平成18年）度をもって、全国的にそのような制度は終結しましたが、現在は、実験結果の信頼性や再現性、安定した個体数確保を目的として最初から実験用として繁殖させた動物（実験動物）を用いられる動物実験が行われている現状もあります。

動物実験有名なのは眼刺激性試験（ドレイズテスト）です。誤って化粧品が目に入ったときの症状を見るためのもので、1944年に開発された毒性試験方法で、ウサギが人間と違い涙が出ないので実験に向いているとされ、ウサギを拘束し片方の目に試験物質を強制的に点眼し、その刺激性を観察するものです。実験されるウサギは手足で眼をこすらないように頭だけ出る拘束器に入れられ、まぶたをクリップなどで固定したまま72時間（3日間）経過観察され、麻酔をかけていないためあまりの痛みから大暴れし首の骨を折って死んでしまうこともあるそうです。（タイトル画像）

動物実験は非倫理的であると非難されますが、その理由は動物実験は動物のクオリティ・オブ・ライフ（QOL）、日常生活動作（ADL）、生活水準（SOL）、つまり「動物の幸せ」を損なうものだからです。また、最初から動物を苦しめることが分かっているにも関わらず、対象薬物や毒物の混餌、投薬などを行うことは広く虐待にあたるとされています。

3Rとは…

3Rは動物実験の基準についての理念で、「Replacement（代替）」「Reduction（削減）」「Refinement（改善）」の3つを表し、1959年にイギリスの研究者ラッセルバーチにより「人道的な実験技術の原則」が提唱されました。動物実験反対運動が欧米各地に広がるようになり、実験動物にも人道的な配慮が求められるようになりました。

Replacement 動物を使用しない実験方法への代替

Reduction 実験動物数の削減

Refinement 実験方法の改良により実験動物の苦痛の軽減

活動20年を経て、ついに全面廃止へ

美しくなりたい、若々しくありたい、そう言った願望を叶える化粧品の開発のために、これまで世界中でウサギやモルモットなどを使った動物実験が行われてきました。しかし、「動物がかわいそう」「動物実験した化粧品を使いたくない」という消費者の声が高まった結果、EUでは化粧品開発のための動物実験を2004年から段階的に禁止、一部例外とされていた試験についても2013年3月11日をもって全面禁止となり、これにより動物実験を伴う化粧品の製造、販売、輸入が出来なくなりました。女性向けの情報・ファッションサイトHAND.comは、動物実験全面禁止までの歴史を振り返る記事を掲載しました。

「もう動物実験はされていないと思っている人もいるのではないだろうか。しかし、この問題はまだ終わっていないのだ。EU諸国では、化粧品製造に関わる動物実験の中止を求めるキャンペーンを20年以上前から行っており、一般にも広く認識されている。人体の安全優先のため即全面禁止という訳にはいかず、実現までには長い年月を必要とした。その時を目前にして感慨深い思いを抱く人は多いはずだ。」

動物実験廃止運動の歴史は19世紀までさかのぼり、1898年、イギリスで動物実験廃止を訴える団体、英國動物実験廃止連盟（BUAV）が設立されたのが始まりです。その後、活動はヨーロッパ全域に拡がり、1996年には400万人の署名を集めました。しかし、化粧品業界の抵抗があり、全面禁止は延期を繰り返しましたが、その中で、化粧品メーカーとして画期的な活動をしたのが、現在世界で動物実験廃止キャンペーンを続けているザ・ボディショップです。ザ・ボディショップは原料、製品ともに動物実験を一切行わず製品化し、BUAVの基準を満たした初めての化粧品メーカーとして高く評価されました。イギリスから始まりヨーロッパ全域へ広がった動物実験廃止の長い道のり。こうして、化粧品以外の動物実験を伴う石けんや歯磨き粉などの製品も一切ヨーロッパの地を踏むことはできなくなりました。

このように、動物実験廃止ではEUが最も進んでいますが、米国では動物福祉法や情報公開法により、動物実験についての情報が透明化されています。日本では最大手の資生堂が、動物愛護の観点から化粧品における動物実験の廃止を目指すことを2010年3月に宣言しました。動物実験を用いて、「情報による保証」「代替法による保証」「ヒトによる最終確認」の3ステップにより原料の安全性を保証する体系を確立し、これにより2013年4月から開発に着手する化粧品・医薬部外品における社内外での動物実験を廃止しました。これは、昨今の動物愛護の世論の高まりを受けて、2011年3月に自社の動物実験施設を閉鎖し、2013年3月には、外部への委託も含めて化粧品開発のための動物実験を全廃する英断を下しました。

「3Rの原則」を基本として動物実験に替わる方法（代替法）の研究が進められています。政府や市民団体の支援もあり、現在では動物を使わない多くの優れた代替法が開発され、臨床試験、臨床実習、疫学（住民）調査、生検、死体解剖といった伝統的な方法の他に、高度な技術を駆使した方法があり、医学研究、製品や化学物質の安全性試験、教育現場での実習などに世界各国で採用されています。

動物実験についても「3Rの原則」の遵守が国際的な流れとなり、日本の「動物の愛護及び管理に関する法律（動物愛護管理法）」にも、この「3Rの原則」が盛り込まれました。しかし、現行法では、代替法利用や実験動物数の削減については「配慮するものとする」という非常に緩い規定であり、事実上なんの強制力もないため、代替法がある実験や重複実験などが平然と行われています。このように、日本では動物実験に対して明確な法的規制がなく、事実上野放し状態だったため、政治の場でも見直しの機運が生まれました。しかし、今年度施行される改正動物愛護管理条例では、「動物実験の3R（苦痛の軽減、使用数の削減、代替法）を責務とする」、「実験施設及び実験動物繁殖販売業者を登録制とする」、「動物実験倫理委員会を設け一般市民が委員会に参加できるようにする」などの改正は学会や製薬業界の猛反対で叶いませんでした。

化粧品メーカーが『美白』『アンチエイジング』などの価値を作りだし、その結果たくさんの動物が犠牲になっていることは大変怖ろしいことです。欧州では消費者の9割が動物実験に反対で、動物実験をしていない商品を好んで購入しています。また、ラッシュジャパンが日本で行なった意識調査を3月10日に発表ましたが、半数の人が動物実験に反対、動物を使用しない代替法については約9割の人が代替法の開発は重要であると回答しています。

動物を犠牲にしないために私たちができること

私たちの生活の贅沢さや便利さのために多くの動物たちが犠牲になっていると知ったら…消費者である私たちはそのライフスタイルを見直すことが大切だと思います。自然に優しい暮らしは、人はもとより動物にとっても優しく、自然や動物たちをむやみに傷つけないことが、結果私たち人間も豊かにしてくれます。

注意しながら生活すれば…

- ・動物実験をしていない製品を購入しましょう
- ・動物実験をしていないかメーカーに問い合わせてみましょう
- ・動物実験していないメーカーに応援のメッセージを送りましょう
- ・家族や友人に動物実験について周知しましょう
- ・私たちは動物や植物など多くの生き物の恩恵を受けて生きています。暮らしを工夫することで、救われる命があることを意識しながら生活しましょう

全ては消費者である私たちの手に委ねられています。今から、暮らしの身の回りを見つめ直してみませんか。